

* * * *

1985年におこなった河川植生の調査の中で、ヒルムシロ属の未報告植物を2種見出した。いずれも雑種と考えられるものだが、特徴がはっきりしており、容易に識別できるものである。

1) ヒメオヒルムシロ *Potamogeton yamagataensis* 一見、生育不良のオヒルムシロかと思われるが、オヒルムシロの沈水葉が厚みのある針状葉であるのに対し、ヒメオヒルムシロのそれは薄く、長い糸状葉である。浮葉をもつが、沈水葉との移行的形態をもつものからよく発達したものまであって、形とサイズが不ぞろいであるのが特徴的である。花はまれにしか見られないが、正常な花粉が形成されないことから、オヒルムシロと狭葉性ヒルムシロ類の一種との間の雑種と推定した。山形県と新潟県北部の河川に分布し、生育地では優占種として群生するのがふつうの状態であった。

2) アイノコセンニンモ *P. kyushuensis* センニンモとヤナギモの中間的形態を示すもので、葉の基部は托葉と合着して多かれ少なかれ葉鞘となり、葉縁には細鋸歯が認められる。しかし、葉の先はセンニンモのように凸出して円頭にはならず、鋭頭である。宮城県と鹿児島県の河川に出現した。

○日本帰化植物誌資料 (1) (浅井康宏) Yasuhiro Asai: Materials for the naturalized flora of Japan (1)

近年、我国の帰化植物フロラも故久内清孝先生を始めとする多くの関係諸氏のご努力によって、次第に明らかになりつつある。

筆者も過去30余年にわたり、全国各地の野外調査と並行して文献上の検討をも進めてきたが、何分にも我国のフロラの二次的構成要素ともいえる外来品の正確な同定は、種々な面で困難を伴うことを改めて実感している次第である。すなわち先に筆者が触れた諸点(本誌 55: 32, 1980)の中でも、特に原産地などにおける関連種の分類学的諸研究の進捗に伴ない、種々な問題点が俎上にのせられ、我国で旧来慣用されてきた基本的な学名すらも、当然変更を余儀なくされている実状にあるといつてよい。したがって、その正確な検討には可成り多くの時間と、国内外における資料の蒐集と研究とが必要とされる。

筆者も、この線に沿って微力ながら努力を重ねてきたが、取敢えず現在、鋭意執筆中の日本帰化植物誌に関連して生じて来た若干のものについて、上掲のような表題の下に逐次公表しておくこととした。なお本稿をまとめるに当たり、長年にわたり種々御教示、御教導を賜った故久内清孝先生、原寛博士を始めとする関係各位に対し衷心より感謝

の意を表すると共に、筆者のもとに貴重な資料を寄せられた全国各地の同学諸氏に厚く御礼申し上げたい。

1. 帰化植物の種内変異品雑俎

従来から筆者が折にふれて述べているように(本誌 55: 32, 1980), 我国へ侵入した帰化植物の渡来時期や定着あるいは分布などに関する記録は、欧米のそれと比較し必ずしも充分とは言えぬようである。この点については先に京大の北村四郎博士も、栽培(園芸)植物の問題に関連して言及しておられる。すなわち植物地理学的立場からしても、新しく日本に持込まれ、栽培されたものを正しく記録しておきたい。今後、その植物が我国へ定着するか否かは、園芸上からみても重要なことである(植物分類, 地理 31:196, 1980), といった主旨を述べられ、その正確な渡来記録の必要性を強調されている。

それと同時に既に完全に我国へ帰化し、広分布を示すに至ったものについては、その実態に関し種々な面(生態学的観点をも含めて)から、詳細な検討を加えることが必要とされる時期に至っているものと判定される。

そこで今回は、現在まで全国各地の同学諸氏から、長年にわたり筆者のもとに寄せられた資料と、それらに対する見解(検討結果)を示すため、我国における帰化定着種の種内変異品の問題について述べてみることにした。このようなことは無意味であるとの謗をまぬがれぬかも知れないが、しかし欧米諸国の実状をみても、本来の自国のフロラ構成種と同等の立場で本問題を扱っていることを勘案し、敢えて公表しておくこととした次第である。それと共に現在まで、貴重な資料を寄せられた地方フロラ調査関連諸氏のご厚意に報いることにした。

1) エゾノミツモトソウについて 周知のように *Potentilla norvegica* L., Sp. Pl. 499 (1753) は、広くヨーロッパや北アメリカなどに生育し、またメキシコ、ユーラシアに広布している。我国でも和名が示すように北海道に多く認められるが、これが本来の自生品か否か原寛博士も疑問視されていた(Hara, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo, III, 6(2): 71, 1952)。その後、筆者は本州(志賀高原)のものを調査し、これを牧草由来の外来品と判定した(本誌 39: 285, 1964)。

ところで、筆者は北海道のものについて、再度にわたる実地踏査を行い、さらに今回(1986)の調査結果をもとに、恐らく古く該地へ移入された牧草に起因する帰化品とみなすのが妥当と考えるに至った。因みに近年、本種は各地の沿海地、荒地などに散見されるようになっているが、改めて再検してみると多少の変異が認められる。一般に本種は *var. hirsuta* (Michx.) Lehmann (ケエゾノミツモトソウ) の学名からも察知されるように、顕著な開出粗毛を有するものである。しかし各地の港湾付近のものを詳細に検討すると、茎が無毛で、葉もほとんど無毛に近いものが見出される。これは *var. labradorica* (Lehm.) Fernald に当たるもので、これにケナシエゾノミツモトソウの名を与え区別しておくこととしたい。

2) シロバナシャグマハギ (新称) *Trifolium arvense* L., Sp. Pl. 769 (1753) はヨーロッパの原産で北アメリカ各地にも広く帰化し、またアフリカ、アジアあるいはハワイにまでも広がっている。一方、我国でも古くから栽培品として記録されていたが、近年各地に帰化植物として点在し、所によっては大群生しているのが認められている。その中に稀に白花品が見出されるが、これをシロバナシャグマハギ form. *albiflorum* Sylven と呼んでおく。

3) ヒメムカシヨモギについて *Erigeron canadensis* L., Sp. Pl. 863 (1753)—*Conyza canadensis* (L.) Cronquist, Bull. Torrey Club 70: 632 (1943) は、明治年間に我国へ渡来して以来、代表的な帰化雑草として君臨している。一般に本種 var. *canadensis* は茎に開出粗毛を密生するが、しかし茎がほとんど無毛に近いものも見出される。この形は、かつて津山尚博士とケナシヒメムカシヨモギ *Erigeron pusillus* Nuttall の所属を検討した折にも俎上にのぼったもので (本誌 42: 367, 1967), 当時、ウスゲヒメムカシヨモギ (津山・未発表) *E. canadensis* var. *glabratus* Gray, Pl. Lindh. 2: 220 (1850)—*Conyza canadensis* var. *glabrata* (Gray) Cronquist, Bull. Torrey Club 74: 150 (1947) とされていたものである。その後、各地のものについて引続き検討を加えてみたところ、このような形もかなり存在することが判ったので、ここに改めて公表しておくこととしたい。

なお、本種の舌状花は通常白色であるが、しかし稀に美しい濃桃色を呈するものがあり、筆者も北海道函館市郊外の放牧地 (1980・8・2) などで見ている。これをベニバナヒメムカシヨモギと呼んでおきたい。

4) シロバナキョウソウ (新称) *Specularia perfoliata* (L.) A. DeCandolle, Monog. Campanul. 351 (1830)—*Triodanis perfoliata* (L.) Nieuwl., Amer. Midl. Nat. 3: 192 (1914) が我国各地で散見されるようになったのは、主に第二次大戦後のことである。殊に近年、各地で群生状態を呈するのが認められる。

ところで本種の花色は、通常濃紫青色あるいは淡紫色を呈するが、かつて筆者は神奈川県藤沢市片瀬海岸に近い小田急沿線の向陽砂地 (1954・5・26) で、ほとんど白色に近い花をつけたものを見出した。当時、久内清孝先生ともご相談の上、上掲の和名を仮称しておいた。このような花色の変異品は、原産地の北アメリカでも稀に存在するようで、*Specularia perfoliata* form. *alba* (Voigt) Steyermark—*Triodanis perfoliata* form. *alba* Voigt とされ、最初アメリカ合衆国の南イリノイ州のものから記録された由である。

なお、本種は北アメリカに広く生育しているが、現在では熱帯アメリカやヨーロッパなどにも帰化しており、汎世界的な雑草となりつつある。

5) ハルジョオンについて かつて筆者は、我国におけるハルジョオンの変異品の若干について述べておいた (本誌 47: 159, 1972)。その後、引続き各地のものを広く観

察してみると、全体がほとんど無毛に近いものがあるのに気付いた。これをケナシハルジョオン *Erigeron philadelphicus* L., Sp. Pl. 863 (1753) var. *glaber* Henry, Ott. Nat. 31: 57 (1917) と呼ぶことにしたい。

6) ノラニンジンについて *Daucus carota* L., Sp. Pl. 242 (1753) はヨーロッパの原産で、南北アメリカにも帰化している。我国でも古くから主に本州中部以西の各地の沿海の向陽草地などに帰化し、群生状態を呈することがある (Hiroe & Constance, Umbellifer. Jap. 29, 1958)。

従来、我国に見られるものは、栽培されたニンジン ssp. *sativus* (Hoffm.) Arcangeli — *D. sativus* (Hoffm.) Roehl. が逸出し、野生化したものとされ、牧野富太郎先生はこれに上掲の和名を与えられていた (本誌 6: 333, 1929)。勿論、このようなものが存在することに異論はないが、しかし第二次大戦後、特に近年、各地の市街地や港湾附近に見られるものは、これとは別系統の恐らくヨーロッパや北アメリカなどのものが、直接侵入したものと判定される。

ところで、全国各地から寄せられた多くの資料を詳細に検討すると、原産地などと同様に種々の変異が認められる。しかし彼地においても、極めて多くの亜種などのランクで分けられている現状を勘案すると、二次的あるいは三次的な渡来(生育)地である我国では、これを細分せず広義に扱っておくのが妥当と考えられる。

従って、ここでは花色の変異品のみをノートしておくに止めたい。すなわち通常のノラニンジン form. *carota* は、複繖形花序の中央部に見られる中心花(大形で同大の花弁をもつ)が淡～濃紫色で、また周辺花(大小不同の花弁をもつ)は白か多少ピンク色を帯びる。一方、中心花、周辺花を問わず全てのものが、ピンク～紫色を帯びるものをハナノラニンジン form. *roseus* Millspaugh, またこれに対して中心花も白色で、周辺花が白～微かにピンクを帯びる程度のをシロバナノラニンジン form. *epurpuratus* Farwell の和名を与えておく。このようなものは、現在、各地に散見されている。

In the present paper, the author described some adventive weeds established in Japan. Among them, few variants were recognized as well as in their native lands, they are as follows: *Potentilla norvegica* L. var. *hirsuta* (Michx.) Lehm. and var. *labradorica* (Lehm.) Fern., *Trifolium arvense* L. form. *albiflorum* Sylv., *Erigeron canadensis* L. var. *glabratus* Gray, *Specularia perfoliata* (L.) A. DC. form. *alba* (Voigt) Steyererm., *Erigeron philadelphicus* L. var. *glaber* Henry, *Daucus carota* L. form. *roseus* Millsp. and form. *epurpuratus* Farw.

(東京歯科大学)